

平成24年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文
高等学校の部 最優秀賞



「反日感情から考える
国際理解のあり方」

会津学鳳高等学校 1学年 原 ひと美

今年10月に中国へ留学する予定だった友人から、留学が打ち切りになってしまったことを聞いた。その原因は、日中関係の悪化による反日デモが過激になり、中国に日本人が足を踏み入れることが危険だと判断されたためだという。確かに最近新聞やテレビで対中国のことについて多くのことが報じられるようになったが、どれも好ましいものではなく、日中間で開かれる会談や催し物が次々と中止になるなどの内容ばかりだった。私は、なぜそこまでの反日感情が中国で生じ、高まってしまうのかを知りたくて日中関係について調べてみた。

中国人が反日感情を抱いているのは今に始まったことではない。日中戦争中に日本が起こした南京事件による現地中国人の虐殺や、資源開発するにあたって、労働力を確保するための中国人強制連行など、いわゆる歴史的背景が原因としてあった。また、2010年には尖閣諸島の領有権問題が、中国人の反日感情の高まりに拍車をかけ、抗議デモも起きていた。そして最近、日中関係はさらに悪化している。ちょうど81年前、満州事変の発端となった柳条湖事件が起き、国が恥を忘れない日として中国が定めている「国恥記念日」の9月18日に、100を超える大規模な反日デモが行われた。また、27日に予定されていた日中国交正常化40周年の記念式典までもが中止となってしまった。さらに中国反日デモ隊による日本企業に対しての強奪、放火が相次ぎ、被害額はおよそ日本円で10億以上にも及ぶという。このように、中国人の反日感情は歴史的側面に大きく関わり、それによって今、日本は大打撃を受けている。

また、中国について調べているうちに、反日感情を抱いている国は中国以外にも存在していることが分かった。台湾や東南アジアでは、日本による植民地統治時代に、現地の女性達が日本軍に慰安婦として無差別な性的暴力を受けたことから、政府が日本に抗議声明を出している。また、日本軍の東南アジアの侵攻と占領統治などにより引き起こされた捕虜や現地住民の大量虐殺という過去により、日本を批判する声が上がった。

オーストラリアでは、東南アジアと同じく非人道的な捕虜の扱いを受けたことに加え、日本軍によるオーストラリア北部・西部沿岸部への空爆があった。近年では、捕鯨問題をめぐって日本を強く非難し、反捕鯨運動が反発化するにつれて、反日感情もともに高まってきた。

さらには、江戸時代から長く貿易関係をもっているオランダまでもが反日感情を抱き、1971年の昭和天皇のオランダ訪問の際に、卵が投げつけられることもあったというのだから驚きだ。悲しいことではあるが、反日感情を抱いている国は中国以外にもたくさん

存在することが事実だった。

私も身内や自分にとって大切な人が誰かに殺されてしまったら、その誰かをきっと憎むだろう。そして、その誰かを取り巻く人達さえも敵視してしまうに違いない。反日感情をもつ国々も、自国の国民が日本軍によって殺されてしまったのだから、日本を憎い目でみるのも人間の感情に従えば当然のことなのかもしれない。

しかしその一方で、2006年に財団法人日本青少年研究所が中国の高校生を対象に実施したアンケートでは、約4分の1の24.5%もの人が「日本を好き」と回答した。また、2009年末、同国で行われた世論調査で、15から20歳までの若年層は最も好きな国として日本を1番多く挙げた。メディアでは反日感情によるデモを大きく取り上げ報道しているが、親日感情も決して無いのではなく、むしろ反日勢力に劣らず中国には存在していた。この事実は決して見過ごしてはいけないことである。

このようなことは中国のみにいえることではない。外務省が2009年にアメリカに対して実施した世論調査では、一般市民の80%、有識者では91%の人が「日本を信頼できる」と答えた。前米国国務副長官であるリチャード・アーミテージ氏は、「日本は文化、政治、安全保障の面でも優れた模範を提供でき、その役割は高まっている」とも述べている。また同じく2009年に台湾での世論調査では、日本に対して「親しみを感じている」という人が全体の69%を占め、日本に対して「親しみを感じていない」という人の占める13%を大きく上回った。さらに、学生のみを対象とした意識調査では、日本を「友好的な国」ととらえる学生が全体の約44%を占めた。このような結果が現れるまでには、過去の多くの人達による努力が隠されているに違いない。また、これからの国際社会に貢献していかなければならない日本にとって大事にしたい結果である。

日本が反日感情をもつ国々にもたらした残虐な行為は決して無かったことにはできない。よって、反日感情が一扫されることは困難だろう。日本はそんな現実を受けとめ、過去に対する責任をこれからもずっと背負っていかなければならない。しかし、謙虚に省みるからといって卑屈になる必要はない。実際、日本は、過去の過ちの償いとして、技術提供や経済援助などに大きく貢献してきた。だからこそ、反日国の中でも同じ高校生や若年層の人達が日本を受け入れる姿勢を示してくれた部分がある。日本のこれまでの取り組みを、国際社会の中で理解してもらうために、さらなる説明が必要になるだろう。そして、今の豊かな日本は、多くの人達の不断の努力の上に成り立っているのであり、それによって今日幸せな生活をおくることができることも忘れてはならない事実である。

私たち日本人は、日本が犯した過去の過ちを二度と繰り返さないという強い意志と、先人の努力によって築き上げられてきた日本という国に対して誇りをもつとともに、世界各国の人々が同様にもっているであろう、自国に対する誇りを尊重していかなければならない。もちろん、言うべきことをしっかりと主張することは大切だ。しかし、日本も国際社会という一つの大きな組織の一部であり、それである以上は、国際社会に貢献していく義務がある。このことが、日本のこれまでの伝統や文化を守り、かつ未来志向の明るい国際社会を築く糧となっていくと信じたい。